

ガラスの街とやま連携展・富山ガラス工房開設 30 周年記念 まなざしとリズム－富山ガラス造形研究所教員 10 人の表現

作品解説

イーリ・スヒー Jiří SUCHÝ

チェコ共和国出身。鑄造ガラスによる彫刻作品を手掛け、近年は刺し子や折り紙など、日本で生活の中で発見したモチーフを表現に取り入れている。《Noto Prayer》は令和 6 年能登半島地震の経験から制作され、能登の黒瓦を思わせる黒色のガラスは悲しみや苦難を、ピンク色のガラスは希望を示している。一方、高温に溶けたガラスで即興的にペインティングを行った《The Touch》には、愛や知識、経験の授受といったテーマが込められている。

松藤 孝一 MATSUFUJI Koichi

長崎県生まれ。2011 年以降、紫外線により蛍光色に発光するウランガラスを用いた作品を展開する。今回の展示において、スケッチの猿や木彫りの熊は世界や生命の連続性を示す存在であり、彼らの視線の先にあるウランガラスの果実は自然に対する人間の介入を思わせる。これらの作品は自然をコントロールしようとする人間社会への批判を含みつつ、人間以外の生き物の目に映る世界の姿への想像から、人間と自然との関係を問い直すことを促している。

吉積 彩乃 YOSHIZUMI Ayano

愛知県出身。ガラスの透明性と、中空の形を作り上げる吹きの方法を活かし、空間そのものを象徴する簡潔な造形を制作している。これを「三次元のキャンバス」として扱い、複合的に色彩や形を構成していくことで、空間の内と外が相互に作用し合うような作品を生み出している。近年はより明快な色彩のコントラストによって、空間をつくる境界をはっきりと意識させつつ、境界や次元の自在な横断を思わせる表現を展開している。

中神 牧子 NAKAGAMI Makiko

愛知県出身。吹きガラスの制作における身体のリズムと、それにとまなうガラスの動きに寄り添いながら、主に暮らしの中で用いられる器を制作する。本展ではガラスの瞬間的な変化を留めた、様々な動きを持つ器が集合し、賑やかな食卓を思わせる楽し気な雰囲気が醸し出される。共に展示される写真は、目の前の器を異なる視点で捉えたとき、それらがどのように存在し得るかについて、鑑賞者の想像をより広げるものとなっている。

本郷 仁 HONGO Jin

秋田県出身。ガラスや鏡と金属を組み合わせ、「みること」について発見や思索を喚起するような作品を制作している。本展の《風景装置》では、細長い鏡が等間隔に並ぶ装置が一定の速度で回転し、風景に変化を創出する。鑑賞者は自らの姿の断片と周囲の風景が混ざり合う様を眺め、「みる/みえる」という前提が攪乱かくらんされる体験を通して、自分や世界の存在が何によって裏付けられるのか、その不確実さに思いを巡らせることとなる。

橋本 亜紗 HASHIMOTO Asa

富山県出身。板ガラスを集積させる方法で作品を制作する。今回の展示作品では、ガラスは規則的なリズムを刻む小さなまとまりを持って立ち上がる。そうしたまとまりがランダムに配置されることで、様々な角度へと光を反射して空間に光を拡散させる。このような作品の姿は、日々経験を蓄積し続ける私たち自身の心の機微が、周囲の世界の見え方をも変化させる様子を映し出しているかのようである。

天笠 夏美 AMAGASA Natsumi

群馬県出身。羽や葉、蜘蛛の巣、マスクといったモチーフを、ガラスによって極めて繊細に表現し、儚く不確実な物事の中に生じる瞬間的な美しさを捉えた作品を制作する。本展のインスタレーションでは、かつて誰かが読んでいた本を起点にガラスの羽が舞い上がり、鳥へと変化して飛び立つ光景が現れる。これにより、見知らぬ誰かの記憶と鑑賞者の時間とが、作品を介して重なり合う空間を生み出している。

ディラン・パルマ Dylan PALMER

アメリカ合衆国出身。器や文様をテーマに、文化における物質的、視覚的な様式と、それらに内在する精神性がいかに伝達されるかについて、作品を通して考察する。「Receiver」(=レシーバー、受信者) シリーズでは、物を受け止める器と、物事を知覚する人間の目に、何かを伝達可能であるという共通点を見出している。作品において複製される目のイメージは、文化の伝達の過程に介在する不特定多数の人々のまなざしを示しているかのようである。

廣瀬 絵美 HIROSE Emi

富山県出身。線状の細いガラスによって光を捉え、光によって空間にドローイングを行うようなインスタレーションを展開する。本展の作品に用いられるコイル状のガラスは、1本ごとに作家の手により作られ、周期的、規則的でありつつ、ゆらぎやずれを持ち合わせている。こうしたコイルを重ねることで現れる、雲や霧のような光の濃淡は、その場所に堆積する空気や時間、記憶といった形のないものに思いを巡らせる媒介として作用している。

木村 珠里 KIMURA Juri

福島県出身。身の回りの世界に存在する、人間が捉えられない物事を可視化するための素材としてガラスを扱う。本展の作品では、白いガラスに現れる線状のくぼみによって、器と思しき形が浮かび上がっている。人間の視点では機能や意味を想像させる形が、人間以外の生き物、例えば虫や魚、鳥、植物などのまなざしで捉えたとき、その機能や意味は無効化され、新たな感覚が立ち上がるのではないか。本作が試みるのはその感覚の表出である。

解説執筆：中島春香（富山市ガラス美術館主任学芸員）